



昭和大学
SHOWA University

—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療
先進医療の推進
良き歯科医師の育成

発行責任者 病院長 馬場 一美
編集責任者 広報委員長 丸岡 靖史
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1

TEL 03-3787-1151(代表)
いちいちごいち

ホームページ: <http://www.showa-u.ac.jp/SUHD/index.html>

ドライマウス専門外来が開設されました

臨床病理診断科 診療科長 美島 健二

この度、顎顔面口腔外科（診療科長 代田 達夫 教授）の専門外来の1つとして「ドライマウス専門外来」がオープンしました。

ドライマウス（口腔乾燥症）は、唾液の分泌低下や蒸発により生じる口腔粘膜の乾燥症状のことです。現在、自覚症状のない方をいれると、我が国におけるドライマウスの患者さんは約800万人から3,000万人と推定されています。唾液は、1日に1~1.5リットル分泌され、その大部分が耳下腺、顎下腺、舌下腺と呼ばれる大唾液腺から分泌されています。

唾液の成分は殆どが水ですが、その中に電解質やタンパク質が混ざり、それらが相互に関連しながら口腔内環境を維持しています。唾液の機能には、口腔粘膜・歯に対する保護作用、微生物に対する抗菌作用、および食物に対する消化作用や食塊形成作用があります。したがって、唾液のもつこれらの作用が期待できないドライマウスでは、口腔内細菌の増加による齲蝕、歯周病、カンジダ症などに罹患しやすくなりま

す。加えて、より重篤な病態としては口腔内細菌を含んだ唾液や食べ物の誤嚥による肺炎（誤嚥性肺炎）があげられます。誤嚥性肺炎は寝たきりの高齢者などに多くみられ、超高齢社会を背景に増加傾向を示しています。高齢者にみられるドライマウスの多くは、高血圧などの基礎疾患に対する治療薬の副作用によるものであることが知られています。その他の原因は、重篤な自己免疫疾患であるシェーグレン症候群、頭頸部癌の放射線治療による唾液腺萎縮、ストレス、口呼吸など多彩であり、その診断・治療には専門の医療機関の受診が望まれます。

お口の中が渇くと感じることが多くなったら「ドライマウス」に罹患している可能性があります。乾燥症状が重篤になる前に、当院「ドライマウス専門外来」の受診を強くお勧めいたします。



口腔水分計を用いた潤い度チェック



P1 巻頭言 ドライマウス専門外来が開設されました

P2 診療科紹介 臨床病理診断科

P3 診療の流れ：障がい者歯科

P4 部署紹介：看護部

編集後記

記事見出しの色分けをいたしました。

■ 患者さん向け、 ■ 医療機関向け、 ■ お知らせなど

臨床病理診断科は、歯学部口腔病理学部門教授の美島健二を科長とし、口腔病理学部門との兼任で業務を行っています。私どもの業務は、各診療科で採取された患者さんの病変を顕微鏡で観察し、病変の種類などを診断することです。その内訳は、病理組織診断・細胞診断・術中迅速診断および病理解剖から成ります。

①病理組織診断：患者さんの病変の一部もしくは全部を各診療科で採取します。採取された組織を当科にて顕微鏡で観察し、どのような病変なのか（良性か悪性か、手術が必要かなど）を決定する「確定診断」を行います。手術が必要と判断された場合は、摘出された病変を細かく分割し、病変の範囲などを決定します。

②細胞診断：各診療科で病変から細胞をこすり取り、ガラス板に塗布します。当科にて顕微鏡で細胞の形を観察し、良性か悪性かの判定を行います。細胞診断は検体の採取が容易ですが、診断の確実性は病理組織診断に比べると劣ります。

③術中迅速診断：手術中に病変や周囲組織の一部を採取し、すぐに病理標本を作製し、病変の診断や病変の取り残しがないか等の判定を行います。結果を手術中に報告することで、外科手術の精度向上に役立っています。

私どもは基本的に患者さんと直接お目にかかる機会はありませんが、病理診断の結果は、治療方針の選択など、患者さんのQuality of life (QOL) に直結します。

質の高い医療を提供できるよう、各診療科と緊密な連携をとり、診断精度の向上に努めています。

臨床病理診断科は当院の業務に加え、昭和大学医学部臨床病理診断科と連携し、口腔がん等の診断にも従事しています。また、地域の歯科医院からご依頼頂いた病理診断についても積極的に対応しております。

近年、さまざまな疾患において、遺伝子やタンパク質に異常がみられることが報告されています。そして、これらの情報の一部は病理診断に役立てられています。当科においても、遺伝子やタンパク質の解析などの先端技術を積極的に取り入れております。

現在、病理診断に従事しているスタッフは6名で、同一病変のダブルないしトリプルチェックを行い、診断精度の維持・向上に努めております。



口腔病理学部門スタッフ



臨床医と顕微鏡を見ながらのディスカッション

診療の流れ：障がい者歯科

障がい者歯科 助教（診療科長補佐） 嘉手納 未季

障がい者歯科は、一般的に考えられている障がいにとらわれず歯科診療に対し特別な配慮が必要な方々の歯・口の総合的な診療科になります。知的障がい、自閉スペクトラム症、脳性麻痺、染色体異常、脳血管障がい、認知症など、さまざまな障がいや全身疾患のある方を対象に診療を行っています。ここでは初診からの診療の流れをご説明いたします。

【初診】患者さんの特性を考慮し、お待ちいただくことのないよう、またお時間を要することも多いため、予約制とさせて頂いております。初診担当医より、お口の中でお困りのこと、お身体の状態や障がいについて確認し、必要に応じてエックス線検査等を行い診断いたします。治療内容やお身体の状態、精神的な影響等に配慮して、外来治療・静脈内鎮静法・全身麻酔法など最適と考えられる治療法を提案いたします。

【外来治療】種々の行動療法を用いて患者さんへのストレスが最小限になるよう努めています。外来はすべて専用診療台のため、さまざまな体位での治療が可能です。安全に配慮して生体モニター下での診療も行います。

【静脈内鎮静法】不安が強い方や体動のある方には歯科麻酔科と連携して、外来で鎮静法下治療を行います。むし歯治療の場合、1回で1～3歯程度の治療が可能です。

【全身麻酔法】全身麻酔下治療は治療によるトラウマを残すことのない方法で、主にむし歯の数が多い場合や、親知らずの抜歯などで行っております。術前の検査は必要ですが、

今まで歯科治療が困難だった方でも治療を受けることができます。環境変化などによる精神的な影響を考慮し、治療内容やお身体の状態にもよりますが、治療日の朝に入院していただき、夕方に退院する対応も行っています。

【全治療終了後】プロフェッショナルケアと予防処置を中心に行い、かかりつけの歯科医院がある場合には連携をして口腔の健康維持管理に努めています。

歯科治療を受けることが難しくお困りの方がいらっしゃいましたら、スタッフ一同、誠心誠意、対応させていただきますので、当院障がい者歯科にご相談ください。



全身麻酔下 歯科治療



障がい者歯科 スタッフ

部署紹介：看護部

看護部 病棟看護師 齊木 里奈
看護部 師長 小西 悦子

看護部は、顎顔面口腔外科・口腔腫瘍外科、中央手術室、病棟の3か所と、併設の内科クリニックへの出向体制をとっており、27名の看護師で看護を提供しています。



入院前 外来オリエンテーション

病棟看護では、麻酔下での歯科治療を必要とする患者さんの全身状態管理や、口腔リハビリの援助、退院後の日常生活指導などを行っています。平均在院日数は、2.3日と短いですが、入院前の外来オリエンテーションから退院後も継続したフォローアップができるよう、多職種と情報共有し、連携した医療の提供に努めています。

昨年度の新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、徹底した感染予防策に取り組むとともに、コロナ禍で治療を受けられる患者さんが、少しでも安心して治療が受けられるよう尽力しています。

また、面会制限がひかれ孤独感を抱えながら治療に取り組まれている患者さんやその家族にとって、最も身近な医療者として心に寄り添える看護師でありたいと日々心掛けています。

経験を重ねたスタッフから若いナースまで年齢を問わず、明るく、笑顔をモットーに、チームワークを大切に日々取り組んでいます。



カンファレンス

公開講座の動画をWeb公開しました

昭和大学歯科病院では、皆様にお口の健康を保つのに役立てていただくため、公開講座を開催することにいたしました。

今年度開催を予定していた令和2年度（第23回）昭和大学公開講座については、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により集合形

式での開催は行わず、Web開催とさせていただきます。

動画公開期間：2021年3月15日(月)まで

URL：http://www.showa-u.ac.jp/SUHD/ext_lect/2020/20210200.html



編集後記

空気の乾燥は大気の透過率を上昇させ、景色をきれいにみせてくれます。よく晴れた日の夕暮れ時、昭和大学歯科病院そばの路上から夕陽に照らされた富士山がみえることをご存知でしょうか。オレンジ色の背景にあの独特のシルエットは、乾燥する今の時期にみえやすいようです。

暦の上では春となりましたが、まだまだ寒い日が続いております。皆さま何卒ご自愛下さいませ。（K.J）